

詩篇90篇

0 神の人モーセの祈り

《無限なる神と有限なる人間》

- 1 主よ。あなたは代々にわたって私たちの住まいです。
- 2 山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまであなたは神です。
- 3 あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」
- 4 まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのように。
- 5 あなたが人を押し流すと、彼らは、眠りにおちます。朝、彼らは移ろう草のようです。
- 6 朝は、花を咲かせているが、また移ろい、夕べには、しおれて枯れます。

《罪ゆえの死》

- 7 まことに、私たちはあなたの御怒りによって消えうせ、あなたの激しい憤りにおじ惑います。
- 8 あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。
- 9 まことに、私たちのすべての日はあなたの激しい怒りの中に沈み行き、私たちは自分の齢をひと息のように終わらせます。
- 10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。
- 11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。
- 12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

《神の御前の楽しみ》

- 13 帰って来てください。【主】よ。いつまでこのようなのですか。あなたのしもべらを、あわれんでください。
- 14 どうか、朝には、あなたの恵みで私たちを満ち足らせ、私たちのすべての日に、喜び歌い、楽しむようにしてください。
- 15 あなたが私たちを悩まされた日々と、私たちがわざわいに会った年々に応じて、私たちを楽しませてください。
- 16 あなたのみわざをあなたのしもべらに、あなたの威光を彼らの子らに見せてください。
- 17 私たちの神、主のご慈愛が私たちの上にありますように。そして、私たちの手のわざを確かなものにしてください。どうか、私たちの手のわざを確かなものにしてください。

詩篇の学びも（五巻中）第四巻に入りました。第四巻は90-106篇までと短く、タイトルが付けられている詩もわずか二つです（90篇、101篇）。本篇は「神の人モーセの祈り」と呼ばれていますが、内容的に見ると、バビロン捕囚の苦しみを経てきた者の叫びに聞こえます。また、全体に漂う人生の無常観は、どこか「伝道者の書」を思わせます。

詩篇「第四巻」冒頭の90～92篇は、「三部作」としてまとめられることもあります。内容的には以下のように分類でき、書かれたと思われる時期もある程度推定されています。

90篇……空しき人生の直中におられる神	〔捕囚中期〕
91篇……危険から守ってくださる神	〔捕囚末期〕
92篇……礼拝において神に仕える喜び	〔帰還後〕

1～6節では、神の無限性と人間の有限性が鋭く対比されています。2節に天地創造のイメージが置かれているのは一目瞭然でしょう。「**山々が生まれる前**」「**地と世界とを生み出す前**」という、何も存在しなかった「無」の世界に生きておられた神の無限性が強調されています。この神の創造の御業のごく一部に過ぎない人間は、神によって「生きるものとなれ」と命ぜられればそうなるし、「塵に帰れ」（3節）と言われればそれに抗うことはできません。「**千年**」（4節）とは、創世記5章に出てくる超長寿であった人類の父祖たちの年齢でも及ばなかった年数が意識されているでしょう。この中の誰も千年には到達していないのです。しかし、この途方もない年数を生きたとしても、神にとっては一瞬に過ぎないということが言われている。137億年と言われる宇宙の年齢すら、神にとっては一瞬のことなのかもしれません。

5節に出てくる「**人を押し流す**」という表現は、命が取り去られることの比喩だと思われます。その死の様が「**移ろう草**」と言われており、人の一生のはかなさが際立っています。「夏草や兵どもが夢の跡」（芭蕉）。日本にも似通った思想があると言えましょう。日本人は死生観において、死を悲しみ、生をはかなむ作品を多く残してきました。死とは逃れられぬ道、受け入れていくほかない運命なのだ…という諦命感がかえって美德のようになっていきました。

一見聖書も同じに見えます。ところが7～12節では、人の死の理由は「**不義**」（8節）の結果であるという厳しい見方がなされるのです。この点で、日本の文学の多くが到達したところとは著しく異なります。「**御怒り**」「**激しい憤り**」（7節）、「**御顔の光**」（8節／ここでは罪を照らし出す光という意味でしょう）、「**激しい怒り**」（9節、11節）、「**御怒りの力**」（11節）と、ご自身の義を踏みにじられた神の怒りが幾度となく表されています。詩人はその怒りを全身で受け止め、戦きました。彼はそれほどに自らの罪を自覚し、審きの下にある存在であることを痛感していたのでしょう。「**私たちの秘めごと**」（8節）と敢えて言われているように、自分が内心気づいていながら良心を苛んでくる罪を埋めよう埋めようとしている姿が描かれています。これが私たち人間の姿だということです。

10節などはまさに「**コヘレト的**」です。「**七十年**」「**八十年**」とは、アブラハムなど族長がもつと長生きだったことが意識された表現であり、自分はそこまで長くは生きられず、「**労苦とわざわ**

い」に満ちた一生を送らなくてはならないことをうなだれながら見つめているかのようです。しかし、同時に12節の願い、「**私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください**」には、限りある人生をそれでも意味あるものにしようとしている詩人のへりくだった心が垣間見られます。

13～17節に見られる訴えの数々は、どのような状況からの救いを求めているものなのか。二つほど可能性があるでしょう。第一に、捕囚の憂き目からの解放に見えなくもありません。第二に、これまでに語られてきた「死の現実」からの救いとも読めそうです。

「**帰って来てください**」で使われている動詞（シュープ）の原意は「悔い改める」であり、あたかも神がイスラエルの民に対してそっぽを向いておられたところから、本来の向きへと向き直させようとしているかのような言い方です。ここに詩人と神との人格的關係が取り戻されてきているようにも感じられます。神に対してそのように言いうるとは！

「**あわれんでください**」（13節）、「**あなたの恵みで私たちを満ちたらせ（てください）**」「**喜び歌い、楽しむようにしてください**」（14節）、「**あなたの威光を彼らの子らに見せてください**」（16節）、「**私たちの手のわざを確かなものにしてください**」（17節）と、ひたすら願いをぶつけていきます。この中で「**私たちの手のわざ**」というのは、日常生活の中で繰り返す営みを指すと思われそうですが、それすらも「**確かなもの**」ではなかったということでしょう。神の恵みと憐れみを実感できないところでは、詩人は生きた心地がしなかったのです。神との關係がすべての基礎であった。その關係を心から実感して生きていきたい。そのような願いが込められているのです。しかも、17節の中で同じフレーズが二度も繰り返されているところに、詩人の切実な思いが重ねられているでしょう。

私たちはこれほどまでに神との關係を求めて生きているのでしょうか。やがて「塵に帰る」私たちの儂い人生であります。その人生に永遠を与えることのできるペルソナ（人格）なる神との交流を日々求めていきたいと思えます。私たちが信じる神は、罪深い私たちの人生の向きを変えることができになる。私たちの「死」の意味さえ、「無」に消えゆくものではなく、「永遠」への入り口となるのです。